

パーソナルの保護者通信

第6号 数学を制することが持つ価値

保護者の皆様へ。いつも大変お世話になっております。

高校受験、大学受験では数学が合否を分けることが多いということを前回記しました。まずはこれについて、深掘りをしておきます。

栃木県の県立高校入試においては数学の難易度がほか4科目に比べ高く、差がつきやすい特徴があります。数学が得意な者が多い宇高も、同じ入試問題ではありますが傾斜配点を設け、成績上位者内であっても点差がつくような細工がされています。よって数学が得点源であることは大きなメリットになります。

大学受験では、理系は当然ながら数学の配点が高いことが多く、点差がつきます。例えば宇都宮大工学部(機械・情報電子系)では、共通テスト1000点、2次試験500点のうち数学は共通テスト200点、2次試験200点と全体のおよそ27%、東北大工学部前期入試では、共通テスト950点、2次試験2000点のうち数学は共通テスト200点、2次試験750点と全体のおよそ33%にのびります。これは割合だけの話ですが、それ以上に数学はそもそも点差がつきやすく(採点基準自体がそのように見せている、という見方もできます)、合否を分ける要因になります。

文系は関係ないとも言えません。文系学部、学科だからと言って数学を全く考慮しない大学もありますが、そういった大学は偏差値帯が下がる傾向にあり、また私立大学が中心になります。学部にもよりますが、“国公立大学を目指すのなら数学を捨てるという選択肢はない”と考えた方が良いでしょう。対して私立大学では、そもそも共通テストの得点を加味しないことや試験で数学が選択科目になっていることがあるなど、比較的数学を重要視せずとも良い環境にあるのは事実ですが、そういった私立大学は高偏差値帯(いわゆるマーチレベル)のところであっても数学は教科書レベルの問題が出題されていたり、数学を選択しないことにより社会科目を複数選択する必要性が生まれ、

結局重い暗記科目が追加されて全体としての負担が増えたりします。数学が苦手だとしてそれを完全に捨てざるのはあまりにもったいないことです。

そういう意味で、中学、高校とともに数学を得意にすることには大きな価値があるわけですが、苦しむ人間が多い科目です。また「中学まで数学は得意だったが、高校になってダメになった」という生徒もいるなど(この原因については以前の通信の通りですが)、いつ苦手意識が芽生えるかは分からないものです。

なんだかここまでの内容が不安を刺激するような数学指導者によるプロパガンダのように思われるかもしれませんが事実です。数学を諦めることはほとんどの大学を諦めることに直結してしまいますし、今は得意だと考えていてもそれが続くとは限りません。中学の時は数学が得意だったから今もなんとなく数学が得意なつもりでいて、成績も段々振るわない結果になってきたにもかかわらずどうにも危機感を感じず・・・本気でやればまたすぐできるようになるはずだと楽観して・・・となるのは避けたいところです。

ちなみに“自称数学が得意”な人間(特に中学生！)は、「今回はケアレスミスさえなければ上位にいった」と得意げに口にすることがありますが、これは成績低迷の立派な兆候です。最上位勢はケアレスミスをせず、ミスをしそうな箇所があれば事前にそこを徹底的に鍛えてしまいますし、自分自身がケアレスミスで失点することをプライドが許しません。ケアレスミスをしてしまうという“不完全な”状況にありながらその立ち位置を受け入れている時点で黄色信号です。

一筋縄でいかないことに真摯に取り組み成果を上げた者は高い評価を得られるものですが、まさに数学はソレです。そしてそのサポート体制が当塾にはあります。一部生徒には仕事も趣味も数学一色だと信じ込まれている悲しき数学マシーンこと私は、授業時間外であれば塾生からの質問対応も可能なだけ受け付けており、勉強法についてもここでは記しきれない多くのことをお伝え出来ます。こと数学に関しては本当に是非頼っていただきたいと思っています。もちろん、在塾生のご兄弟の方も。

今週もご覧いただきありがとうございました。

種市 匠